14父への恋文（藤原咲子）

―私は「」。幼いころ、小説家だった父を困らせるために、父が書いた原稿を隠したことがある。……

文鎮を取り上げると、再び父の途方にくれた険しい顔が浮かぶ。が、次の瞬間には、「①お先まっ暗だ。」とからかう父のが、間断なく押し寄せては［　Ⅰ　］について離れなくなっていった。

「やっぱり隠そう……。②私は今、おこっているんだから。」

私は、原稿用紙の厚い束を手にした。しかし、その厚さ、重みに再びした。

「そうだ、表紙の一枚だけにしよう。そうすれば、お父ちゃんを大して困らせることはできないけれど、𠮟られることもない……。」

自分の名案に感動しながら、表紙の一枚を探し始めた。それらしき一枚は、厚い束の中程にあって、原稿用紙ではなく、硬い方眼用紙であった。そっと抜き取り、明るい窓辺で隅々まで眺めまわした。赤、青、黄の色鉛筆が、数本のグラフを描き出してあり、落書きのようにも思われた。

「なんだ、お父ちゃんの落書きか……。」

けれど、よく見ると、名前のようなものも細かく列挙されていて、他の用紙とちがい、特に丁寧な字体から想像すると、非常に重要な一枚のようにも思われた。私はしばらく、タバコの香りのしみついた書斎の窓辺に立って考えた。

「まあいいか、これにしよう。これを隠そう。③私は今、おこっているんだから。」

方眼用紙を筒のようにグルグルまるめると、私は、ゾクゾクする興奮で［　Ⅱ　］が紅潮してくるのがわかった。そして、父が、その一枚の紛失に気づくまでの数日間を思い浮かべながら、小躍りをして書斎を出た。

「私を𠮟らない？」

「チャキは𠮟られるようなことをしたのか。」

翌日の夜、私は父に書斎へ来るように呼ばれた。書斎の戸を、恐る恐る開けた目の前には、昨日こっそり抜きとって、私の机の引き出しに隠してあったはずの方眼用紙が、壁に貼られてあったのである。

「これはね、小説構成表というものでね、ものすごく大切なものなのだよ。この表を基にして小説を書き進めるんだ。横が時間を表して、つまりページ数、縦は登場人物や場所、事件……。」

父は私に背を向けたまましゃベり続けていた。私は、兄たちと争うように食べた庭ののせいで、口の周囲にできた小さなただれが、④ずきずきといたのを覚えている。

問１　―線部①の「先」には、別のどのような意味が込められているか。次から選び、記号を◯で囲め。

ア　幸　　イ　咲　　ウ　前

問２　［　］Ⅰ・Ⅱに入ることばをそれぞれ次から選び、記号で答えよ。

ア　額　　イ　目　　ウ　耳　　エ　頰

Ⅰ＝（　　　）　　Ⅱ＝（　　　）

問３　―線部②について、私は何に「おこっている」のか。それが書かれている部分を文中から二〇字以内で抜き出して答えよ。

〔　　　　　　　　　　　　　　　　　　　 　　　　〕

問４　―線部③について、ここで再び自分に言いきかせているのはなぜか、答えよ。

〔　　　　　　　　　　　　　　 　　　　　　　　　　　　　　　　　〕

問５　―線部④に込められた「私」の気持ちとして、最も適当なものを次から選び、記号を○で囲め。

ア　用紙を隠したことへの後悔

イ　書斎に来たことへの後悔

ウ　無花果を食べたことへの後悔

問６　上の文章を二段に分けるとすれば、後段はどこから始まるか。後段の最初の五字を答えよ。

〔　　 　　　　〕

【解答】

問１　イ

問２　Ⅰ＝ウ　Ⅱ＝エ

問３　「お先まっ暗だ。」とからかう父の嘲笑（18字）

問４（例）父の原稿を隠すことに対する迷いを振り払い、ふんぎりをつけるため。

問５　ア

問６　「私を𠮟ら

ポイント

問１･３　前途の見通しが全くつかない＝「お先まっ暗」の「お先（将来）」が、たまたま筆者の名前「咲子」＝「お咲」と同音で、父親にからかわれた。